TADOKU JUNIOR　イギリスの昔話　★★★☆☆ ふつう　781語

The Master and his Pupil

先生とでし

Joseph Jacobs（1890年の本）　**原文そのまま**　朗読：Joy Chan

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　なんでも知っている先生の、ひみつの黒い本。先生がるすのあいだに、でしの少年がこっそり読んでしまうと、おそろしいあくまがあらわれて……。



There was once a very learned man in the north-country who knew all the languages under the sun, and who was acquainted with all the mysteries of creation. He had one big book bound in black calf and clasped with iron, and with iron corners, and chained to a table which was made fast to the floor; and when he read out of this book, he unlocked it with an iron key, and none but he read from it, for it contained all the secrets of the spiritual world. It told how many angels there were in heaven, and how they marched in their ranks, and sang in their quires, and what were their several functions, and what was the name of each great angel of might. And it told of the demons, how many of them there were, and what were their several powers, and their labours, and their names,

and how they might be summoned, and how tasks might be imposed on them, and how they might be chained to be as slaves to man.

Now the master had a pupil who was but a foolish lad, and he acted as servant to the great master, but never was he suffered to look into the black book, hardly to enter the private room.

One day the master was out, and then the lad, as curious as could be, hurried to the chamber where his master kept his wondrous apparatus for changing copper into gold, and lead into silver, and where was his mirror in which he could see all that was passing in the world, and where was the shell which when held to the ear whispered all the words that were being spoken by anyone the master desired to know about. The lad tried in vain with the crucibles to turn copper and lead into gold and silver—he looked long and vainly into the mirror; smoke and clouds passed over it, but he saw nothing plain, and the shell to his ear produced only indistinct murmurings, like the breaking of distant seas on an unknown shore. "I can do nothing," he said; "as I don't know the right words to utter, and they are locked up in yon book."

He looked round, and, see! the book was unfastened; the master had forgotten to lock it before he went out. The boy rushed to it, and unclosed the volume. It was written with red and black ink, and much of it he could not understand; but he put his finger on a line and spelled it through.

At once the room was darkened, and the house trembled; a clap of thunder rolled through the passage and the old room, and there stood before him a horrible, horrible form, breathing fire, and with eyes like burning lamps. It was the demon Beelzebub, whom he had called up to serve him.

"Set me a task!" said he, with a voice like the roaring of an iron furnace.

The boy only trembled, and his hair stood up.

"Set me a task, or I shall strangle thee!"

But the lad could not speak. Then the evil spirit stepped towards him, and putting forth his hands touched his throat. The fingers burned his flesh. “Set me a task!”

“Water yon flower,” cried the boy in despair, pointing to a geranium which stood in a pot on the floor. Instantly the spirit left the room, but in another instant he returned with a barrel on his back, and poured its contents over the flower; and again and again he went and came, and poured more and more water, till the floor of the room was ankle-deep.

“Enough, enough!” gasped the lad; but the demon heeded him not; the lad didn't know the words by which to send him away, and still he fetched water.

It rose to the boy's knees and still more water was poured. It mounted to his waist, and Beelzebub still kept on bringing barrels full. It rose to his armpits, and he scrambled to the table-top. And now the water in the room stood up to the window and washed against the glass, and swirled around his feet on the table. It still rose; it reached his breast. In vain he cried; the evil spirit would not be dismissed, and to this day he would have been pouring water, and would have drowned all Yorkshire. But the master remembered on his journey that he had not locked his book, and therefore returned, and at the moment when the water was bubbling about the pupil's chin, rushed into the room and spoke the words which cast Beelzebub back into his fiery home.

むかし、北の国に、とても学問のある人がいました。その人は世界中のあらゆる言葉を知っていて、この世のなりたちのふしぎを、すべて知っていました。先生は、黒い子牛のかわでつくられ、鉄のとめがねと鉄の角かざりがついた大きな本を1さつ持っていました。本は、ゆかにしっかりとめられたつくえに、くさりでつながれていました。先生はこの本を読むとき、鉄のかぎであけました。先生のほかには、だれもこの本を読むことはありませんでした。この本には、目に見えない世界のひみつが、すべて書かれていたからです。本には、天国に天使が何人いるのか、天使たちがどのように列を作って行進し、声をそろえて歌うのか、それぞれどんな役目があるのか、そして力のある大天使ひとりひとりの名前が書いてありました。それから、あくまのことも書いてありました。あくまが何人いて、それぞれどんな力を持ち、どんな仕事をしていて、何という名前なのか。そして、どうやってよび出し、どうやって仕事を言いつけ、どうやってくさりにつないで人間のめしつかいにするのか、ということも書いてありました。

さて、先生には、ひとりのでしがいました。でしは、ただのおろかな少年で、えらい先生のめしつかいとしてはたらいていましたが、黒い本をのぞくことはけっしてゆるされず、先生のへやに入ることさえ、ほとんどゆるされていませんでした。

ある日、先生が出かけていると、少年は、知りたくてたまらなくなって、先生のへやへ急ぎました。そこには、どうを金に、なまりを銀にかえる、ふしぎな道具がありました。世界でおこっていることがすべて見えるかがみもありました。それに、耳に当てると、先生が知りたいと思った人の話していることが、すべてささやき声で聞こえてくる貝がらもありました。少年は、るつぼを使って、どうやなまりを金や銀にかえようとしましたが、うまくいきませんでした。かがみを長いあいだのぞきこみましたが、けむりや雲が通りすぎるばかりで、はっきりしたものは何も見えません。貝がらを耳に当てても、知らない遠い海べで波がくだけるような、ぼんやりしたざわめきが聞こえるだけでした。「ぼくには何もできないや」と少年は言いました。「正しいじゅもんを知らないんだもの。じゅもんは、あの本の中にとじこめられているんだ。」

少年があたりを見まわすと、なんと！本のかぎがあいていました。先生は出かける前に、かぎをかけるのをわすれていたのです。少年は本にかけよって、本をひらきました。本は赤と黒のインクで書かれていて、ほとんどわかりませんでしたが、少年は1行に指をあてて、一字ずつ読んでいきました。

そのとたん、へやはまっくらになり、家がゆれました。ろうかと古いへやにかみなりがとどろき、少年の前に、おそろしい、おそろしいすがたのものが立っていました。それは火をはき、目はもえるランプのようでした。それは、少年が自分につかえさせようとよび出してしまった、あくまのベルゼブブでした。

「仕事を言いつけろ！」と、あくまは、鉄のかまどがごうごうとうなるような声で言いました。

少年はただふるえるばかりで、かみの毛がさかだちました。

「仕事を言いつけろ。さもないと、おまえの首をしめるぞ！」

でも、少年は口がきけませんでした。すると悪いまものは少年のほうへ進み出て、手をのばして少年ののどにさわりました。その指は、少年のはだをやけどさせました。「仕事を言いつけろ！」

「あの花に水をやって」と少年は、どうしようもなくなってさけび、ゆかの上のはちにうえてあるゼラニウムをゆびさしました。たちまちまものはへやを出ていきましたが、すぐにたるをせおってもどってきて、たるの中の水を花にざあっとかけました。そして何度も何度も行ったり来たりして、どんどん水をかけたので、へやのゆかは、くるぶしまで水につかってしまいました。

「もういい、もういいよ！」と少年は息をきらして言いましたが、あくまはまるで聞きません。少年は、あくまを帰らせるじゅもんを知らなかったので、あくまはなおも水を運んできました。

水は少年のひざまで上がり、それでもまだ水がそそがれました。水はこしまで上がり、ベルゼブブはなおも、水のいっぱい入ったたるを運びつづけました。水はわきの下まで上がり、少年はつくえの上によじのぼりました。そして今では、へやの水はまどまでとどいてガラスにうちよせ、つくえの上の少年の足のまわりでうずをまいていました。水はまだまだ上がり、むねまでとどきました。少年がいくらさけんでもむだでした。悪いまものは帰ろうとしません。このままだったら、あくまは今でも水をそそぎつづけ、ヨークシャーじゅうを水びたしにしていたことでしょう。けれども先生は、旅のとちゅうで本にかぎをかけわすれたことを思い出し、引き返してきました。そして、水が少年のあごのあたりでぶくぶくあわ立っていたちょうどそのとき、へやにかけこんで、じゅもんをとなえ、ベルゼブブを火のもえるすみかへおい返したのでした。

たんご と クイズ 先生とでし

book 本	key かぎ	mirror かがみ
shell 貝がら	flower 花	barrel たる
water 水		

Q1 先生がかけわすれたものは何ですか？

① 戸のかぎ　② 本のかぎ　③ まどのかぎ

Q2 少年は、あくまにどんな仕事を言いつけましたか？

① 花に水をやること　② 金を作ること　③ へやをそうじすること

Q3 水があふれたのは、どうしてですか？

① 雨がふったから　② 川があふれたから　③ あくまを止めるじゅもんを知らなかったから

こたえ

Q1 ② 先生は出かける前に、黒い本にかぎをかけるのをわすれていました。それで少年が本を読んでしまったのです。

Q2 ① こわくてどうしようもなくなった少年は、ゼラニウムの花に水をやって、と言いました。

Q3 ③ 少年はあくまを帰らせるじゅもんを知らなかったので、あくまはいつまでも水を運びつづけたのです。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #7439（Joseph Jacobs、1890年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：Joy Chan（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは 3 重チェック。人の目でも順次確認しています。